

両親のこと

第二十四回生（昭和十七年卒） 吉田君子

真夏の暑い昼下り、一通の封書が届きました。めったに私あての手紙など来ないのにと達筆のその手紙を開くと、戸山の同窓会の役員さんで私の同級生^(注一)のお姉様でもある、篠原先生からの原稿依頼の手紙だったので。

さてさて困ったことになった。文才もない私が何を書いたらよいのでしょうか？

時々出席する同期会の席上で何時も云われる言葉は、「おばさんに似ているね」。何の事はない、当時の母の面影を私に重ねてなつかしがっているだけなのですね。

でもやっぱりうれしい。

私の両親は、豊島^{とよしま}のおじさん、おばさんと、皆さんから親しまれ、可愛がって頂いた小使いさんです。当時幼かった私は、道すがら、両親と連れだつて歩いている時、小使いのおじさん、おばさんと呼ばれる事が恥ずかしかったのです。やはり私には見栄があつたのですね。

父は声をかけられると、「ハイ」と、それはそれは私共には見せない笑顔で答えるのです。父は四歳で母親を亡くし、父親の手一つで育てられ、生後二ヶ月の妹と三

人で貧苦の生活をしたといえます。北海道の原野で、馬を友として遊んで大きくなつたと聞かされました。

六歳の時に、炭を馬に積んで町迄行くのです。幼い子供が売りに来るのを待っていてくれるおかみさん達の暖かい心が、生涯忘れられない思い出となつたし、又それが人に接する時の心得であると会得したのだと思います。

学問もない父でしたが、決して負けませんでした。私達も「貧乏なんてちつとも恥ずかしい事ではない。むしろ貧乏に押しつぶされて自分を見失う方がもっと恐ろしい」と教えられました。そんな父です。他人に親切で、戦後の焼野原で父と子がやっと生きている姿を見て仕事を引つけてやり、自分の過去の姿を見るようだったので、自分の過去、ほっておけなかつたようでした。戦争が激しくなつて、空襲の度に奉安殿のお写真をお護りするお仕事は父にとっては重責だつたようです。大空襲で戸山ヶ原に逃げ、何故か父と二人きりになつた時に、一発の焼い弾で大切な戸山小学校が焼け落ちるのを目の前で見つめた口惜しさは今でも忘れられません。

それから、じきに群馬の玉村^{たまむら}のお寺に疎開^(注二)して天野先生^(注三)（校医さんでしょうか）のご家族と本堂に住んだ事やら、そして一

級上の光子さんと離れた井戸端でお茶わんを洗つた事も思い出です。私は玉村の女学校に転校しましたが、洋裁が大の苦手で中川美代子先生（現篠原先生）に縫って頂き、お蔭で良いお点が取れました。あの頃父母は疎開地で子供の世話、そして姉は寮母として頑張りました^(注四)。みな心を一つにして頑張つたと思います。

焼けない前の戸山小に、よく宿直の父のお弁当を届けに、姉と二人大きな声で歌いながら、足早にガードの下を通つた思い出。黄昏の戸山ヶ原はなつかしい幼い時の故郷です。

共働きの両親の帰りを待つて夕闇迫る路地に立っていると、二人のシルエツトがだんだんと近づく時のうれしさ。ささやかな私の倅せでした。良き師、良き友に恵まれ、幸福に暮らせる現在、今更乍ら有り難いと思えます。

亡き両親も戸山小学校が大好きでした。そして先生方を大変尊敬して居りました。父の入院中戸山の卒業生がお見舞に来て下さつた事を父はとても喜んで居りました。みなさんに親切にして頂いた両親に代わりましてお礼を申し上げたいと存じます。そして、戸山小の同窓会の益々のご発展を御祈り致して居ります。

（昭和六十一年・とやま第八集）

(注一) 中川悦 二十四回生、同窓会幹事として永く尽力した。平成二十九年没。

(注二) 加藤紀夫「集団疎開について」とやま第十集(昭和六十三年)二十八頁に、玉村町字南玉所在金蔵寺ななきま、こんざう 四〇六年女兒

引率教師 原ミツ・田中恭子、中略 用務員 豊島富次・豊島キヨノとある。

(注三) 同二十五頁には校医・天野医師とある。同二十九頁には「町医もあつたが、保護者会員の天野医師が疎開して来られたので、全面的に健康管理・治療等をお願いする。たいへん心強く、また、事故もなし。」とある。

(注四) 同二十八頁に、玉村町字斎田所在 観音寺 一〇三年男児 引率教師 高安八郎・谷田川和夫、寮母 豊島玉枝とある。

豊島富次、豊島キヨノ夫妻(昭和三十五年)



(昭和十一年)

